大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

悔悟者の告白：『モル・フランダース』論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006300

悔悟者の告白 —
『モル・フランダース』論

近　藤　直　樹

I

悪運尽きてニューゲイトに送り込まれた時、モルは過去の生涯を後悔する。だが、その後悔はモルに安らぎをもたらさない。なぜなら、彼女が自ら認めたように、「罪を犯したからではなく、苦しまなければならない故に、悔悟者となった」[(1)]からである。罪の意識にさいなまれているのではなく、「地獄そのものの象徴あるいはその入口のように思われる」(p.258) ニューゲイトと、逃がれようもない来たるべき絞首刑の恐怖がモルに後悔の気持ちをおこさせたにすぎない。罪ではなく罰を、原因ではなく結果を恐れるモルは、真の悔悟者ではなく、従って彼女が心の平安を得られないのは当然である。そして、ニューゲイトという場所はモルの心をますます頑にし、彼女は神の慈悲を求めることも、それを考えることもやめてしまう。そのようなモルに強い反省の気持ちを生じさせる出来事がおこる。ランカシャーの夫（ジェミー）が投獄されたのである。彼女の結婚遍歴の中で唯一愛情を感じたジェミーの破滅は、自分が大金持ちだと思わせたことに原因があると考えるモルは自責の念にかられる。

> I was overwhelmed with grief for him; my own case gave me no disturbance compared to this, and I loaded myself with reproaches on his account. I bewailed his misfortunes, and the ruin he was now come to, at such a rate, that I relished nothing now as I did before, and the first reflections I made upon the horrid, detestable life I had lived began to return upon me, and as these things returned, my abhorrence of the place I was in, and of the way of living in it, returned also; in a word, I was perfctly changed, and become another body. (pp.264-65)

しかし、これでモルが真の悔悟者になったわけではない。まだ彼女は、「神に罪を告白し、キリストの御名において許しを乞う気持ちにはならなかった」(p.266) のである。それは、死刑の見通しが彼女を圧倒したからであり、以前とは別人になったという言葉に偽りがあるのではない。事実、モルは変わったのだ。死刑判決を受けた後、モルは牧師の言葉に初めて耳を傾け、牧師と一緒に跪いて神に祈る。その時初めてモルは、「ほんとうの悔悟の気持ち」(pp.269-70) を感じるのである。そして牧師に心を開き、彼の求めに応じてモルは自分の生涯を告白する。

> This honest, friendly way of treating me unlocked all the sluices of my passions.

He broke into my very soul by it; and I unravelled all the wickedness of my life to him. In a word, I gave him an abridgment of this whole history; I gave him the picture of conduct for fifty years in miniature. (p.271)

牧師への告白は、モルの悔悟が本物であることを物語る。そして、それはこの作品の成立事情をも示唆する。牧師に告白したことは、ここでモルが言っているように、彼女の生涯の 'abridgment' であるから、告白が表象する悔悟の気持ちも割り引いて考えなければならない。実際、モルはその後も、実弟との結婚にまつわることについてはジェミーに隠し続けるのである。告白が 'abridgment' でなく完全な形をとった時、すなわちモルが自らの生涯の告白である『モル・フランダース』という作品を書き上げた時、モルは真の悔悟者となったということができる。

モルは真の悔悟者として自らの生涯の物語を書いた。また逆に、それを書くことによって（告白することによって）真の悔悟者になった。だが、いずれにしても、モルは自分のためにだけこの物語を書いたのではない。その目的は読者が教訓を汲みとることであると、モルは何度も繰り返し述べる。それは自己正当化でもある。モルはいつも自己を正当化せずにはいられない。彼女のこの性向が最も明瞭に現われているのは、バーソロミュー・クロウスで供の者もなく一人で家に帰る途中の女の子からネックレスを盗んだ時のひとりごとである — 'I had given the parents a just reproof for their negligence in leaving the poor little lamb to come home by itself, and it would teach them to take much care of it another time' (p.192)。これは、全くの屁理屈にすぎないが、悪も役に立つことがあるという考えは、'a horrid complication of wickedness, whoredom, adultery, incest, lying, theft' (p.263) である彼女の人生も読者の役に立つことができるという考えに通じる。デフォーもまたそう考えた。

. . . there is not a superlative villain brought upon the stage, but either he is brought to an unhappy end, or brought to be a penitent; there is not an ill thing mentioned but it is condemned, even in the relation, nor a virtuous, just thing but it carries its praise along with it. What can more exactly answer the rule laid down, to recommend even those representations of things which have so many other just objections lying against them? namely, of example, of bad company, obscene language, and the like.

Upon this foundation this book is recommended to the reader, as a work from every part of which something may be learned, and some just and religious inference is drawn, by which the reader will have something of instruction, if he pleases to make use of it.[2]

もちろん、モル・フランダースにモデルがあったとしても、この作品はデフォーの創作なのであるから、デフォーの序文での弁明とモルの弁明は軌を一にしている。デフォーは、モルと

同じように、自己弁明という自己正当化をせずにすますことはできないのである。

そして、モルの物語を読者に提示することに、宗教的側面から正当性を与えているのが、モルが最後には真の悔悟者になるという事実である。悔悟者は許されるべきだからだ。[3] モルを最後に悔悟者にすることによって、デフォーはこの作品の道徳性と、それを公にする正当性を確信することができた。

モルが悔悟者となることは、キリスト教のコードが支配する社会的コンテクストの中に存立しているこの作品にとって、ヒロインとしてのモルが読者に共感をもって受け入れられるための前提条件でもある。この条件の下で、E.M.フォスターが言うように、モルは「一本の木のように立つ」ことができる。[4] また、この条件の下で、デフォーは自らの心情をモルに託すことができたのである。悔悟者としてモルが幸福を得ることは物語の目的上必要な結末なのであり、絞首刑に終わる criminal lives のコンヴェンションをデフォーは破って、ロマンスの結末のようなハッピー・エンディングとしたのもそのためである。しかし、モルの悔悟は最終段階の結果であり、そこに向かって進行する彼女の人生が、教訓を汲みとるべくわれわれに与えられた物語である。

II

モルが実弟との結婚という近親相姦にまつわるすべてのことをジェミーに告白して真の悔悟者となるのは、ヴァージニアですべての問題が解決して安定した生活が確保されてからであることは、意味深いことである。悔悟者となって神に祈り、内なる平安を得るためには、生活という外面の安定が欠かせないのだ。孤島に打ち上げられたロビンソン・クルーソーにしても、初めて神に祈る気持ちがおこるのは、一人で暮らしてゆけるめどが立ってからであった。クルーソーは『ロビンソン・クルーソー反省録』の中でこう懐述している。

> The anxiety of my circumstances there, I can assure you, was such for a time as was very unsuitable to heavenly meditations, and even when that was got over, the frequent alarms from the savages put the soul sometimes to such extremities of fear and horror, that all the manner of temper was lost, and I was no more fit for religious exercises than a sick man is fit for labour.
>
> Divine contemplations require a composure of soul, uninterrupted by any extraordinary motions or disorders of the passions . . .[5]

魂より先に肉体がある。肉体なくして魂はない。(その道はありうるが。) 肉体の維持は生物としての先決問題である。だから、一かけらのパンも一滴の水もない荒野をさまよう隠者を描く者は、隠者が生きてゆけるように奇蹟をでっち上げなければならない、とクルーソーは言う。[6] 隠者とてパンや水は欠かせない。もちろんモルにも欠かせない。だが、生きてゆくために必要などんなものも、自らの力で手に入れなければならない境遇にモルは生まれた。安定した

生活とは対極の状況で、ニューゲイトに生まれたのである。

> I have been told that in one of our neighbour nations, whether it be in France or where else I know not, they have an order from the king, that when any criminal is condemmed, either to die, or to the galleys, or to be transported, if they leave any children, as such are generally, unprovided for, by the poverty or forfeiture of their parents, so they are immediately taken into the care of the Government, and put into an hospital calld the House of Orphans, where they are bred up, clothed, fed, taught, and when fit to go out, are placed out to trades or to services, so as to be well able to provide for themselves by an honest, industrious behaviour.
> Had this been the custom in our country, I had not been left a poor desolate girl without friends, without clothes, without help or helper in the world, as was my fate; and by which I was not only exposed to very great distresses, even before I was capable either of understanding my case or how to amend it, but brought into a course of life which was not only scandalous in itself, but which in its ordinary course tended to the swift destruction both of soul and body. (pp.33-34)

明らかに、ここで開陳されている孤児の問題には、デフォーの社会批判が反映されている。デフォーは物語の冒頭から社会問題を提出しているのである。これを初めとして、ニューゲイトの不条理さの告発やアメリカへの移民奨励など、彼は自らの考えをこの作品の中に織り込んでいる。

> [Defoe] gives himself over to Moll's rambling life, spins out her thoughts, and makes her a wanderful individual character and an effective vehicle for expressing many of his life-long opinions.[7]

デフォーのこの作品への介入は、すでに序文からもうかがわれる。彼は、モルの書いたオリジナルの文章に、読者が読むにふさわしいように手を加えた、と言う。それは、この物語を実際に書いたのがモルであることを強調するあざとい手法であると同時に、モルの物語にデフォーが並々ならぬ関心をいだき感情移入していることをも示している。デフォーはモルと共に17世紀のイギリスの現実を生きようとしたのだ。[8]

この世に生まれるや否や孤児として社会に投げ出されたモルは、その社会の中で自らの人生を自らの力で切り開いていかなければならない。「人間が歴史をもつのは、かれらがかれらの生活を生産しなければならないから、しかも一定の様式でそうしなければならないからである」[9]とマルクスが言うように、モルは結婚したり愛人となったり泥棒となったりして、生活を生産し、自らの歴史(ヒストリー)＝物語(ストーリー)を創り上げていく。結婚したり愛人となることが可能な間はその手段を追求し、それが不可能な年齢になると盗みの生活に入る。合法であろうと非合法であろうと、

モルは生きるためにそうするのであり、彼女がとるそれらの生活手段に本質的な違いを認めることはできない。モルはそれぞれの段階において、自らに許された生活手段を用いるのである。つまり、

> 人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係を、とりむすぶ。[10]

と、マルクスが述べた一般的公式が、そのままモルの個人的生涯にあてはまるのだ。モル自身も、逮捕された後、自らの意志とは関係のない運命によって「長い間私を待ち受けていた」ニューゲイトに送り込まれることになったと感じる — 'It seemed to me that I was hurried on by an inevitable and unseen fate to this day of misery' (p.259). Douglas Brooks はこのモルの運命を個人的なものとみなし、モルの物語が今まで考えられていたよりはるかに個人的なものであるとして、この作品から社会性を引き離そうとするのだが、[11] モルの運命は彼女の意志の及ばぬ社会が課したものである以上、その主張は正当ではない。魂より先に肉体があるように、個人より先に社会があるのである。

> . . . 国家は、家族やわれわれ個人よりも、自然の順序において先のものである。なぜなら、全体は部分よりも先でなければならないからだ。というのは、（身体の）全体が取り去られて、手や足だけがあるというようなことはないだろうからだ。[12]

モルの前には17世紀イギリス社会がある。それはモルより先にある。その現実の中へ、社会という荒波の中へ、モルはたった一人で乗り出すのである。

III

モルにとって社会は、戦うべき相手（＝敵）であるのではなく、その一員となるべきものである。しかも、'gentlewoman' として社会の一員になることをモルは欲する。8才の時、奉公人として社会に出されるという話を聞いて、モルは泣いて抵抗し、'gentlewoman' になるのだと断言する。しかし、それは通常の意味における 'gentlewoman' のことではない。

> . . . all I understood by being a gentlewoman was to be able to work for myself, and get enough to keep me without that terrible bugbear going to service, whereas they meant to live great, rich and high, and I know not what. (p.38)

モルは単に、自分の稼ぎだけで食べていける女性 — それだけでも極めて困難であることは容易に推測できる — になりたいと言っているのであるが、彼女は自分の進むべき道をすでにこ

の段階でアイロニカルに宣言している。自分が知らなかった意味での‘gentlewoman’への道をモルは歩むことになるのだ。しかも、面倒をみてもらっていた nurseに「どのようにして gentlewoman になるのか、fingers' end によってか？」と尋ねられた時、モルはその問いに無邪気に肯く。もちろん、fingers' end によって生きるとは針仕事によって生計をたてるという意味であるが、それはモルが将来盗みによって‘gentlewoman’の体面を保とうとするようになることを暗示している。また、私生児を生んだある婦人を‘gentlewoman’の代表として名ざしするモルは、将来自分か私生児を生むことになるのである。モルと nurse のやりとりに皮肉は全くないのだが、‘gentlewoman’という言葉が呪文のようにモルの社会的目標を決定し、モルは一生その目標から逸れることはないのだ。

しかし、そのようなモルの人生行路は、更に早い段階のエピソードにも示唆されている。モルが思い出すことができる最初の記憶は、ジプシーの一団と共にさすらったけれども、自らの意志でその一団から離れた、ということである。ジプシーは社会において差別を受ける側であり、そこからモルが自発的に離れることは、彼女が社会の上層身分への指向を我知らず持ち合わせていることを物語っている。そして、それが8才の時、‘gentlewoman’になるという言葉に結実されるのである。クルーソーが出世するために放浪癖に駆られて海に乗り出していったように、モルはニューゲイトという最悪の場所から、社会的身分を求めて人生の旅に乗り出すのだ。

8才の時我知らず予言していた運命を、経済的観念だけをいだいてモルは歩み続けるわけではない。経験によって得た教訓がモルにその運命を歩ませることになる。彼女にその教訓を与えたのは、コウルチェスターで世話になっていた家の長男との恋愛である。モルは打算からではなくほんとうに彼を愛したが、パターンに則ったこの恋愛関係が結婚にまで至らないことは、当時の社会事情から当然予測されることであり、長男の妹の言葉によってそれは裏付けられる。

> ‘Betty [Moll] wants but one thing, but she had as good want everything, for the market is against our sex just now; and if a young woman have beauty, birth, breeding, wit, sense, manners, modesty, and all these to an extream, yet if she have not money, she's nobody, she had as good want them all, for nothing but money now recommends a waman; the men play the game all into their hands.’ (p.44)

才能と美貌はあるにしても、金はなく、まして孤児であるモルは長男と結婚することはできない。モルは裏切られた。そして、彼女に求婚した弟のロビンと失意のうちに結婚することになる。モルにとってそれは幸福なことではなかった。「欲望の中で毎日兄と近親相姦の罪を犯す」(p.77)モルの心は平安から程遠い。弟のロビンの名だけを明らかにして、兄の方は名は伏せているところにも、モルの受けた打撃の程を知ることができる。だから、5年後にロビンが死ぬまでの結婚生活についてモルは何も記さない。夫の死に際しても妻たるにふさわしい悲しみを感じなかった、とモルは言う。夫の両親が引き取ることになった二人の子供のことも彼女にとっては重大な関心事ではない。モルにとって最も重要なことは、ロビンが死んで1200ポ

ンドばかりの財産をもつ未亡人になったということである。夫が死ななければ、モルは愛を感じることはないにしても、そのままつつがなく平凡な一生を送ったであろう。しかし、幸か不幸か、現実はそうはならなかった。そして、モルは多少の金と人生への教訓を得た。

> The case was altered with me ; I had money in my pocket, and had nothing to say to them [suitors]. I had been tricked once by that cheat called love, but the game was over; I was resolved now to be married or nothing, and to be well married or not at all. (p.77)

今度はモルが、男は金がなければ何者でもない、と考えることになるのである。だが、この決心はモルの行動を賢明なものにはしなかった。モルが再婚相手として選んだ呉服屋は、並はずれた見栄っぱりの浪費家で、2年3ヵ月余りで破産し、投獄されるのである。そして彼はフランスに逃げてしまったために、この結婚がモルに残したものといえば、財産の損失と夫がいながら未亡人であるという不安定な身分だけである。生活の安定こそ第一目標とするモルにはそれは耐え難い状況であり、それ故彼女は三度目の結婚をする。妻という地位が、モルにとって唯一安定した社会的身分であり、金のある男との結婚が生活の安定を保証してくれるからである。

結婚市場が女性に不利であり、結婚が利益を得るための政略にすぎないことを、そして、結婚に愛がいささかも関係のないことを、モルはすでに十分理解している。不利な条件をかいくぐり、金のある男と結婚して生活の安定を得ること、それがモルの選ぶ最善の道である。そのためには策略を用いることをも辞さない。ここには男対女の構図さえもみてとれる。モルは、同姓の友人のために一肌脱ぎ、策略を用いて彼女に有利な条件で結婚を取り結んだりするのである。この友人と共謀して、今度はモルが一人の男をつかまえ結婚する。三度目の結婚相手であるその男は、後に実の弟であることが判明するのだが、この近親結婚にモルの責任はない。それは不幸な偶然の結果である。運命はモルに対して常に逆風を吹きつけるのだ。ニューゲイトで生まれたモルを社会へたった一人で送り出した運命の逆風は、やがてモルをニューゲイトに送り返すことになるのだが、それはまだ先のことである。

ほんとうの夫であるロビンとの結婚において、「欲望の中で毎日兄と近親相姦の罪を犯」したモルは、今度は現実に実の弟と近親相姦の罪を犯し、子供までもうけるのである。想像上のことや夢の中のことが現実になるということは、この作品に限らず『ロビンソン・クルーソー』などにもみられるデフォーの常套手段であるが、その最も悲劇的な現実化がこの近親相姦である。モルは近親相姦を忌み嫌うが、それは社会が近親相姦を忌み嫌うのと軌を一にする。それは、社会の一員であるモルが犯してはならない禁忌なのである。モルは全面的に社会的慣習を受け入れているのだ。モルにとって社会は嫌悪したり反抗したりする対象ではない。両親の反対を押し切って後悔に出たクルーソーにも、社会を嫌悪したり反抗したりする意志は全くなかったように、モルにとって社会は敵ではない。確かに、モルが将来働くことになる盗みは反社会的行動であるが、社会に挑もうなどという気持ちはモルにはさらさらない。それ故、人間社会

の倫理的な禁忌である近親相姦にモルは耐えることができない。迷いながらも、意を決してモルは実弟との結婚を清算する。それは、クルーソーが cannidaliam に耐えることができなかったのと同じ心理である。モルもクルーソーも共に社会的人間なのだ。『ロビンソン・クルーソー』とは正反対の状況設定の下で、社会と人間の関係や人間の社会性を、デフォーは『モル・フランダース』において追求しているのだ。

情婦という身分は、公に認められた妻という身分に比べて望ましいものではなく、モル自身もそれを嫌悪するけれども、彼女にとって生きてゆくための選択肢の一つである。バースの愛人と取り結んだ関係も、実弟との結婚を解消し、ヴァージニアから一人でイギリスに帰ったモルが、経済的安定を得るためにとった手段である。経済的安定こそモルの行動原理なのだ。バースの愛人と別れた時、モルは言う。

> . . . I knew what I aimed at and what I wanted, but knew nothing how to pursue the end by direct means. I wanted to be placed in a settled state of living, and had I happened to meet with a sober, good husband, I should have been as faithful and true a wife to him as virtue itself could have formed. If I had been otherwise, the vice came in always at the door of necessity, not at the door of inclination; and I understood too well, by the want of it, what the value of a settled life was, to do anything to forfeit the felicity of it; nay, I should have made the better wife for all the difficulties I had passed through, by a great deal; nor did I in any of the times that I had been a wife give my husbands the least uneasiness on account of my behaviour. (pp.135-36)

モルにとって「良き夫」とはまず第一に「安定した生活」を与えてくれる男である。そういう男の妻になること、というよりむしろ妻という役割を演じることが、モルにとっては一つの経済活動なのであり、社会と取り結ぶ関係である。愛のためではなく、経済的理由から妻という役割を演じることが、ロビンとの最初の結婚以来モルが選んだ道である。

モルは結婚生活を経済生活と考えているのであるから、子供に対して大きな関心を示さないのもうなずける。里子に出す際に子供のことを気づかう場面もあるが、モルの第一関心事は自らの生活と財産状況である。彼女には子供に対して親としての深い愛情を感じる余裕はないのだ。ハンフリーが唯一の例外であるが、それはモルがニューゲイトから解放されて新世界でジェミーと共に新しい生活を始めてからのことである。デフォーは経済的・社会的安定がモルに自然の情を感じさせる余裕を与えたこと主張しようとしているのかもしれない。しかし、モルが親としての愛情を示す唯一の例外がハンフリーであるのは不条理である。今や愛する夫となったジェミーと間に生まれた子供を初めとして、その他多くの子供のことには一言も言及せずに、実弟との近親相姦から生まれたハンフリーに対してのみ親としての情を感じ、涙を流すのはおかしい。ハンフリーとの再会において、モルは息子に対して母としての愛情をいだくと同時に、打算も働かせているのである。モルには、自分が母から譲られることになっていた遺産につい

てハンフリーから聞き出すことに大きな目的があった。その遺産はモルの当然の権利である。そのために彼女はハンフリーの母だと名乗り出た。残酷な言い方をすれば、モルは自らの権利のために母親という役を演じたのだ。

モルの人生は、コウルチェスターの家の長男との仲を隠してその弟のロビンの妻の役を引き受けた最初の結婚以来、演技の連続であった。モルは、自分が何者であるかを隠し、資産家の未亡人を装い、有利な結婚を求めた。実弟との結婚もその結果なのであり、近親結婚が全くの偶然であるにしても、強いて言えばモルが自分のアイデンティティを隠した点に非を認めることもできるかもしれない。また、ジェミーとはお互いのだまし合いであり、モルは彼を愛するようになったけれども、別れざるを得なかった。ジェミーの子供を生んだ後、モルは銀行家と結婚するのだが、その時彼女は自らの欺瞞をこう自己批判している。

> 'What an abominable creature am I! and how is this innocent gentleman going to be abused by me! How little does he think, that having been divorced a whore, he is throwing himself into the arms of another! that he is going to marry one that has lain with two brothers,and had three children by her own brother! one that was born in Newgate, whose mother was a whore, and is now a transported thief! one that has lain with thirteen men, and has had a child since he saw me! Poor gentleman!' (p.181)

このようにモルは自らの心に言うのだが、かといってこの結婚を放棄するわけではない。この自己批判に続けてすぐモルは、妻として夫に忠実を尽くし愛を捧げようと心に決めるのである。殊勝そうにみえるモルの自己批判は、結婚することを決めた上でのことなのだ。モルは弁解をしているにすぎないのである。

モルの論理は、妻という身分を愛 — 自然の情としての愛ではない — によって購おうとする経済的思考に基づいている。つまり、モルにとって男の金と女の愛は等価なのである。その等価交換が結婚に他ならない。妻たることは、経済的安定を得るために演じる役割であると同時に、それは一つの職業でもあるのだ。針仕事という職業によって金を得ることと、妻という職業によって金を得ることの間には、手に入れる金額の多い少ないがあるだけであって、職業であることに関しては違いはない。モルは、8才の時心に決めた針仕事ではなく、より有利であるという理由で後者を選ぶのである。

Ⅳ

銀行家との安定した生活は5年しか続かない。モルが48才の時、夫は負債の心労から死んでしまうのである。未亡人になるということは、モルにとって、妻という職を失うことに他ならない。モルの職業としての結婚生活が長く続かないのは、デフォーがそれを是認していないからである。Everette Zimmerman が言うように、デフォーのフィクション以外の作品を彼の

小説に適用するのは危険であるが、経済的理由による結婚は性的理由による結婚と共に、*Conjugal lewdness* (1727) において糾弾されているのだ。[13]

夫が死ぬたびにモルは別の夫を見つけて、いわば再就職してきたが、今回は48才という年齢が大きくたちはだかってくる。「求婚される年齢を過ぎた」モルは、財産を食いつぶしながら悲惨な状態で暮らしていたある日、悪魔の囁きによってまったく出来心で盗みを働く。これを契機として彼女は盗みの道に入ってゆくことになる。モルにとって、盗みは生きてゆくための生業である。妻となることが生活のために仮面をかぶった職業であったように、盗みもまた生活のために変装して働く職業である。モル自身の意識の上でもそうなのであり、彼女は盗みのことを 'trade' と呼んでいるのだ。*The complefe English Tradesman* (1726) において 'trade' を称賛するデフォーであるが故に、モルが 'trade' という語を使う意味は大きい。極言すれば、モルは妻から泥棒に転職したにすぎない。世間や仲間から自分のアイデンティティを隠すことがこの稼業には大切なのであり、その術をモルは結婚遍歴において学んだのである。例えば、Darid Blewett はこう言う — '[Moll's] career of marriages gained through deception is a preparation for the coolness and disguises necessary for her career as thief.'[14] 職業という観点から、結婚と盗みを本質において同じレヴェルでとらえることが、モルの人生を考える上では必要なことなのだ。

針仕事よりも結婚を選んだのと同じ理由で、モルは針仕事よりも盗みを選ぶ。モルが最初に盗みの道に入ったのは、このままではいずれ餓死してしまうという恐怖からだが、ある程度たくわえができてその恐怖が薄らいでも彼女は足を洗わない。針仕事でまっとうに暮らしていくことも考えるが (p.198)、考えるだけで実行はしない。「貧困は正直な人をも悪党にする」[15]ことが不回避であるにしても、今やモルを駆り立てるのは貧困ではなく貧欲である。彼女自身もそれを認めている。モルの動機が貧欲となった以上、そこに情状酌量の余地はない。モルが盗みの技術に長け、危機をいかにうまく切り抜けていこうと、教訓を掲げる物語の性質上、彼女は結局は捕らえられなければならない。経済的安定を得るための妻という欺瞞に満ちた職業が常に挫折に終わったように、貧欲のために自らの良心を欺く泥棒という職業が挫折に終わるのは必然なのである。強硬な保守派を装って *The Shortest Way with the Dissenters* (1702) を著わしたデフォーがニューゲイトに入れられたように、自己を常に隠蔽し変装を続けながら生きてきたモルは、生まれた場所であるニューゲイトに罪人としてもどることになる。それは同時に、モルを罪の道から救い出すことでもある。'. . . 'tis evident to me, that when once we are hardened in crime, no fear can affect us, no example give us any warning' (p.214)、と語るモルは、罪の道から救い出すには、罪を犯すことが不可能な場所に彼女を追いやる以外にはないのだから。

「その名を口にしただけで血も凍る」ニューゲイトが長い間自分を待ち受けていたことをモルは認め (p.258)、そして自分の人生をこう概括する。

> . . . my course of life for forty years had been a horrid complication of wickedness, whoredom, adultery, incest, lying, theft; in a word, everything but murder and

treason had been my practice from the age of eighteen, or thereabouts, to threescore . . . (p.263)

弁解のためではなく、客観的にモルは人生を振り返っている。モルは罪を認める気持ちになっているのであり、それは悔悟への第一歩である。しかし、罪人を真の悔悟者とすることはニューゲイトという場所が許さない。ニューゲイトは人の心を石にしてしまうからである。

. . . like the waters in the cavities and hollows of mountains, which petrify and turn into stone whatever they are suffered to drop upon, so the continual conversing with such a crew of hell-hounds as I was, had the same common operation upon me as upon other people. I degenerted into stone; I turned first stupid and senseless, then brutish and thoughtless, and at last raving mad as any of them were; and, in short, I became as naturally pleased and easy with the place, as if indead I had been born there. (p.262)

反省する気持ちがあるにもかかわらず、モルは単なる 'Newgate-bied' になり下がってしまう。ニューゲイトとはそういう所なのである。ここにはデフォーのニューゲイトに対する批判があるのだが、その批判を具体的な形で示すために、彼はモルをヴァージニアへの流刑に減刑させることによってニューゲイトから解放することを選んだ。心が石化した 'Newgate-bied' のままのモルではなく、彼女が唯一愛した夫ジェミーを投獄させることによって彼女の石化した心に衝撃を与え、悔悟への扉を開かれた者として、デフォーはモルをヴァージニアへ送り、新しい人生を始めさせる。たった一人で現実に立ち向かって生きたモルにはその資格がある。そして、その減刑に正当性を与えているのが、モルの牧師への告白なのである。告白はすなわち悔悟であり、悔悟者は許されるべきだからである。

V

経済的安定のために結婚したり盗みを働くことは、当然非難されるべきことであり、デフォーもモルを糾弾する立場に立っている。モルが結局ニューゲイトに送り込まれるところに、そのデフォーの立場が示されている。だが、彼は一方的にモルを非難しているのではない。彼女を創り上げたのは社会の現実なのであり、彼女の背後にある社会をデフォーは作者として確と見据え、その現実と果敢に対峙するヒロインにデフォーは好意をもいだいている。モルの逮捕は彼女を罪の道から救うことでもあったことを思い出そう。そして、デフォーはモルが処刑されることを許さず、最終的にはモルを悔悟者として、彼女が終生願っていた安定した生活を送らせるのである。

デフォーは、社会と個人の関係に焦点を合わせてこの作品を構成している。モルにとって、個人として生き抜くことは社会の一員として生きることに他ならず、そのモルがとり得ること

のできた道は社会の道徳に反するものたらざるを得なかった。個人としてのモルは責められるべきであるが、社会の現実という背景の中にモルを置く時、彼女は違った姿で現われる。罪人としてモルがニューゲイトに投獄されるのは当然であるが、結婚も盗みも彼女にとっとは生きてゆくための生業だったのである。モルに生業たるそれらの「職業」を強いたのは社会であり、デフォーも社会もそのためにモルを罰する。だが、デフォーはモルを悔悟者とし、悔悟者となった故にモルを許すのも社会（社会コード）である。デフォーは社会と個人の一種の弁証法を試みているのだ。

モルが意識する社会の根柢にあるのは金である。社会の一員になることをめざすモルの行動は、この金に動機を持つ。結婚や盗みという手段によって金を手に入れることが、モルにとって社会の一員に加わることなのである。それは一つの処世術であるが、それだけではモルは幸福になることができなかった。モルに欠けているものとしてデフォーが提示するものが愛である。金が社会の基本にあるのに対し、個人の基本にあるのは愛なのだ。それ故、悔悟者としてモルが新たな人生を歩む最終的な結婚相手は、かつて真に愛し合ったジェミー以外にはあり得ない。モルの悔悟と愛の成就のために、デフォーはジェミーをモルのいるニューゲイトに送り込んだのだ。この結婚において愛と金が、個人と社会が均衡を保つのである。モル個人においても、悔悟者であることによって、過去の邪悪な自己と現在の自己が均衡を保つ。ここにこの作品の小説としての構造があり、均衡を保った構造物を創り上げるという小説家の仕事を、デフォーは果たしているのである。

注

(1) Daniel Defoe, *The Fortunes and Misfortunes of the Famous Moll Flanders* (Penguin Books), p.29. 以後本作品からの引用はこの版により、括弧内にページ数を付与する。

(2) *Moll Flanders*, 'The Prefsce,' p.30.

(3) ルカ伝にはこうある。

'If your brother wrongs you, reprove him; and if he repents, forgive him. Even if he wrongs you seven times in a day and comes back to you seven times saying, "I am sorry", you are to forgive him. (Luke, xvii, 3-4)

悔悟に対するデフォー自身の見解については次の詩句を参照。

Thieves, Highway-man, and Murtherers are sent To *Newgate* for their future Punishment, But all Men pity them when they repent. (*More Reformation*. Maximillian E. Novak, *Defoe and the Nature of Man*, London, 1963, p.13 より引用)

(4) E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (Penguin Books), p.68.

(5) Daniel Defoe, *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe. Romances and Narratives by Daniel Defoe*, ed. George A. Aitken (London; J. M. Dent, 1895), III, 7.

(6) *Ibid.*, p. 12.

(7) Paula R. Backscheider, Moll Flanders: *The Making of a Criminal Mind* (Boston: Twayne Publishers, 1990), p.11.

(8) この作品が出版されたのは1722年であるが、モルがこの物語を書いたのは1683年ということになっ

ている。

(9) 『ドイツ・イデオロギー』古佐由重訳（岩波文庫），41頁。

(10) 『経済学批判』武田隆夫他訳（岩波文庫），13頁。

(11) '*Moll Flanders*: An Interpretation,' *Essays in Criticism*, XIX (1969), 57.

(12) 『アリストテレス』（中央公論社，世界の名著8，1979）所収、田中美和太郎他訳『政治学』、69−70頁。

(13) *Defoe and the Novel* (Berkeley : Vniversity of California Press, 1975), pp.80−81.

(14) *Defoe's Art of Fiction* (Tronto: University of Toronto Press, 1979), pp.76−77.

(15) *Serious Reflections*, p.33.